

KIMURA Momoko

木村 桃子

東京都出身

2019 武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程美術専攻彫刻コース修了

* solo exhibition

2025 「領域の高さ」 second 2./東京

2023-2024 「移動美術館・アートトラック vol.3 星と人のけしき」一般財団法人カルチュラルライツ/関東を中心に各地巡回

2023 「袋を積む」 galerie H/東京

2022 「もれる光 のびる線」 galerie H/東京

2021 「木馬と星」 WALLA/東京

2019 「Unmasked」 galerie H/東京

2018 「間隙を縫う」横須賀飯島商店/神奈川

* group show

2026 「対象と位置」 Maki Fine Arts/東京

明倫AIR 2025成果展「あたらしい家」旧木津邸/鳥取

2025 「群馬青年ビエンナーレ2025」群馬県立近代美術館/群馬

トーキョーアーツアンドスペースレジデンス2025 成果発表展「リング・フランカ」トーキョーアーツアンドスペース本郷/東京

ART SANPO 2025/（今治市内の店舗を巡回）愛媛

「明倫AIR 2024」倉吉淀屋(旧牧田家住宅)、仲倉食料品店/鳥取

ArtSticker × MATSUZAKAYA NAGOYA 「明日を着るための方法 / How to slip into the tomorrow」松坂屋名古屋店/愛知

2024 「半井桃水館芸術祭 シャンデリア」半井桃水館/長崎県

「別府マイクロアーティストインレジデンス 成果展」BEPPE STUDIO 01/大分県

2023 「半井桃水館芸術祭」半井桃水館/長崎県

「Asyl 一饒舌でいるための寡黙な複数のタスク」アートかビーフンか白厨/東京都

「お湯のつかれ」別府マイクロ・アーティスト・イン・レジデンス展. Art&Garden ねこぜ/大分県

「あたらしい場所」(滞在制作参加) アートギャラリーミヤウチ/広島県

「どこかで」広島芸術センター/広島県

「出張モノログス #3」GASBON METABOLISM / 山梨県

「八色の森の美術展 価値観と分断をしなやかに超えて」池田記念美術館/新潟県

2022 「八色の森の美術展 たおやかなまなざし」池田記念美術館/新潟県

「いとまの方法」杉並学園アートプロジェクト 児童養護施設杉並学園/東京都

「LIFE LINE」gallery face to face/東京

「助教・助手展2022」武蔵野美術大学美術館/東京

2021 「八色の森の美術展 語りかけるいろ、目覚めるかたち」池田記念美術館/新潟県

「助教・助手展2021」武蔵野美術大学美術館/東京

「歪んだ場所」武蔵野美術大学apmg/東京

2020 「まあ、新しい生活様式 都市鉱山の調理法」early bird /東京

「八色の森の美術展 かたちになる力」池田記念美術館/新潟県

「Make the knot」gallery face to face/東京

2019 「助手展2019 武蔵野美術大学助手研究発表」武蔵野美術大学美術館/東京

「CAF賞2019 入選者作品展」代官山ヒルサイドフォーラム/東京

「One Man Show+」gallery face to face/東京

「でんちゅうストラット 星をとる」小平市平櫛田中彫刻美術館/東京

「平成30年度 第42回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」国立新美術館/東京

「平成30年度 武蔵野美術大学卒業・修了制作展」武蔵野美術大学美術館/東京

* public works

2021 世田谷区玉川総合支所等々力庁舎 桜の木ベンチアートワーク「水と木のリビング」設置

* award

2019 権鎮圭賞(権鎮圭事業財団、武蔵野美術大学彫刻学科研究室)

2017 清水多嘉示賞(武蔵野美術大学五賞)
MONSTER Exhibition2017 最優秀賞
日本文化藝術財団 第22回奨学生選出

* artist in residency

2024 Tokyo Arts and Space二国間クリエイター派遣事業ケベック(モンリオール)/カナダ派遣



Photo:Comura Mai

個展「領域の高さ」@ second. 2 /Installation View
2025



Photo:Comura Mai

Argo

2025

40.5×60×8.5 cm

木、光ファイバー、着彩

Argo

wood, fiber optics, paint



Photo:Comura Mai

Subaru

2025

19×10×17cm

木、光ファイバー

Pleiades

Wood,Optical fiber



粘土で人の頭（首像）を作る際、「額を作る時には後頭部の角度も感じるように」「鼻の頂点は対角線上の頭頂部を意識しながら形をおさえなさい」と指導されたことが記憶に残っている。彫刻を学ぶためのデッサンでも、2次元には現れない対角線の向こう側を意識するようと言われた。

一般的な木彫制作では、製材した木の正面、背面、側面、天面に原寸大の図案を罫書き、そのシルエットに沿って切り出していく。私はこの工程の、最初の一面が切り出された状態に強く関心を持った。「断面」と「厚み」が共存するこの状態に何が現れているのか、という問いが制作の起点となっている。

近作では、この思考を「星座」というモチーフに拡張し、星の光の奥行きと、その光にまわりつく量感を扱っている。光ファイバーやパイプを用いて断面間を光が貫通する構造を作り、その距離を時間として捉えることで、目に見えない時間を物質として感じられる造形を試みている。

地球から見える星座を異なる場所から見た時、どのような断面になるのか。異なる視点から見たシルエットをつなぐボリュームは、どのような表情を持つのか。

こちらの断面と向こう側の断面。その間をつなぐボリュームが彫刻となるのではないか。この仮説をもとに制作を行っている。



Photo:Comura Mai

Kirin

2025

19×10.5×17cm

木、光ファイバー

Camelopardalis

Wood,Optical fiber



Yagi

2025

17.5×25×24.5cm

木、光ファイバー

Capricornus

Wood, Optical fiber

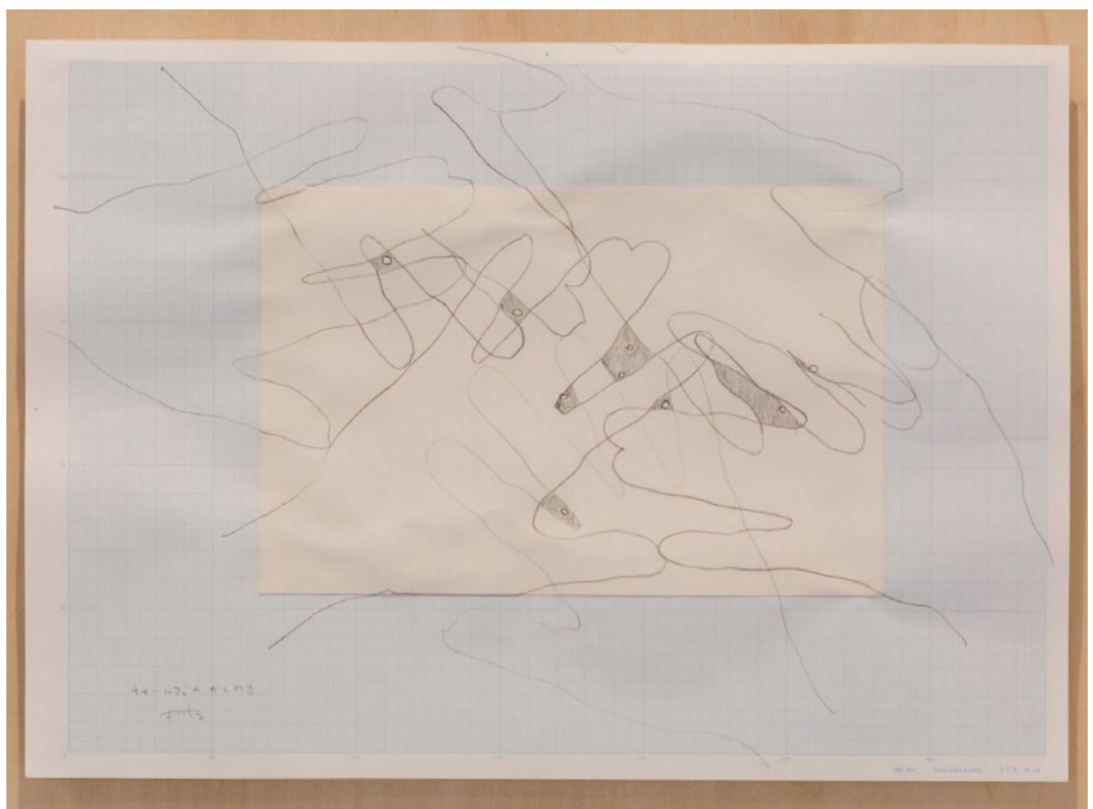
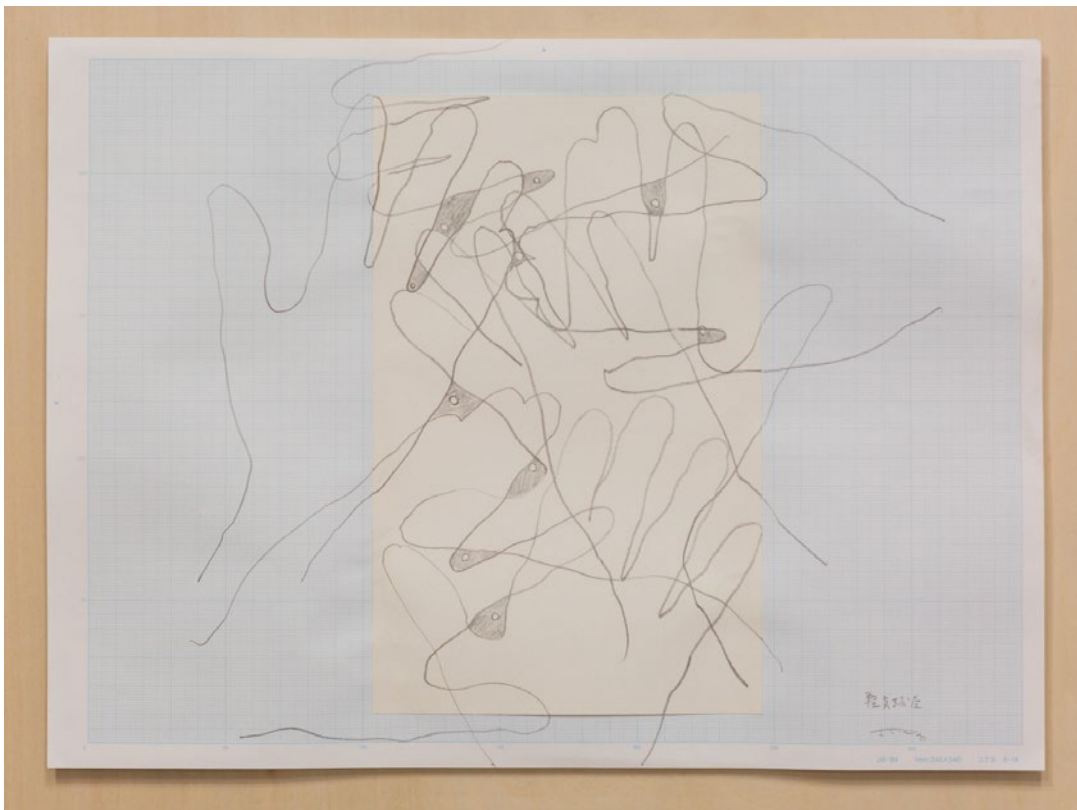


Photo:Comura Mai

軽気球のドローイング / チャールズのかしの木のドローイング

2025

255×362(mm)

紙、鉛筆

Globus Aerostaticus Drawing / Robur Carolinum Drawing

Paper, pencil

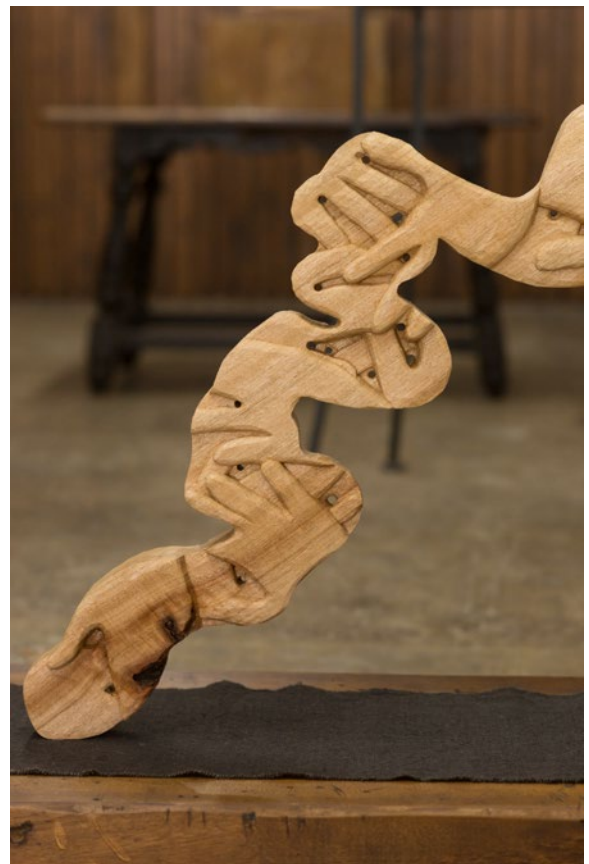


Photo:Comura Mai

Tigris
2025
26×100×4.5 cm
木

Tigris
wood



Photo:Comura Mai

蠅と蜂

2025

93×43×65cm

木、アクリル棒、鉛筆

Musca-Apis

Wood, acrylic rods, pencil



Photo:Comura Mai

軽気球

2025

41.5×27×4 cm

木、着彩

Globus Aerostaticus

Wood, paint



Photo:Comura Mai



滞在期間 2024 年 4 月 9 日 - 7 月 3 日

Photo: Alexis Bernard

カナダで発生する森林火災への関心から、モン・ロワイヤルを中心に据えたモントリオールで人々は森林や木々に対してどのように考え暮らしているのか、インタビューやリサーチから作品を制作しインスタレーションへと繋げた。

Residency period: April 9 – July 3, 2024

Motivated by my interest in wildfires in Canada, I explored how people in Montreal, a city centered around Mount Royal, live with and think about forests and trees. Through interviews and research, I developed these observations into artworks and an installation.



Photo:Alexis Bernard



2024 年度二都市間交流事業プログラム 〈ケベック〉
カナダ (モントリオール) の Centre CLARK でのオープンスタジオの様子

2024

Open Studio at Centre CLARK, Montreal, Canada
2024



Installation View

トーキョーアーツアンドスペースレジデンス 2025
成果発表展「リンガ・フランカ」
2025

"TOKAS Creator-in-Residence 2025 Exhibition 'Lingua Franca',"
Tokyo Arts and Space Hongo

Photo:TAKAHASHI Kenji
Courtesy of Tokyo Arts and Space

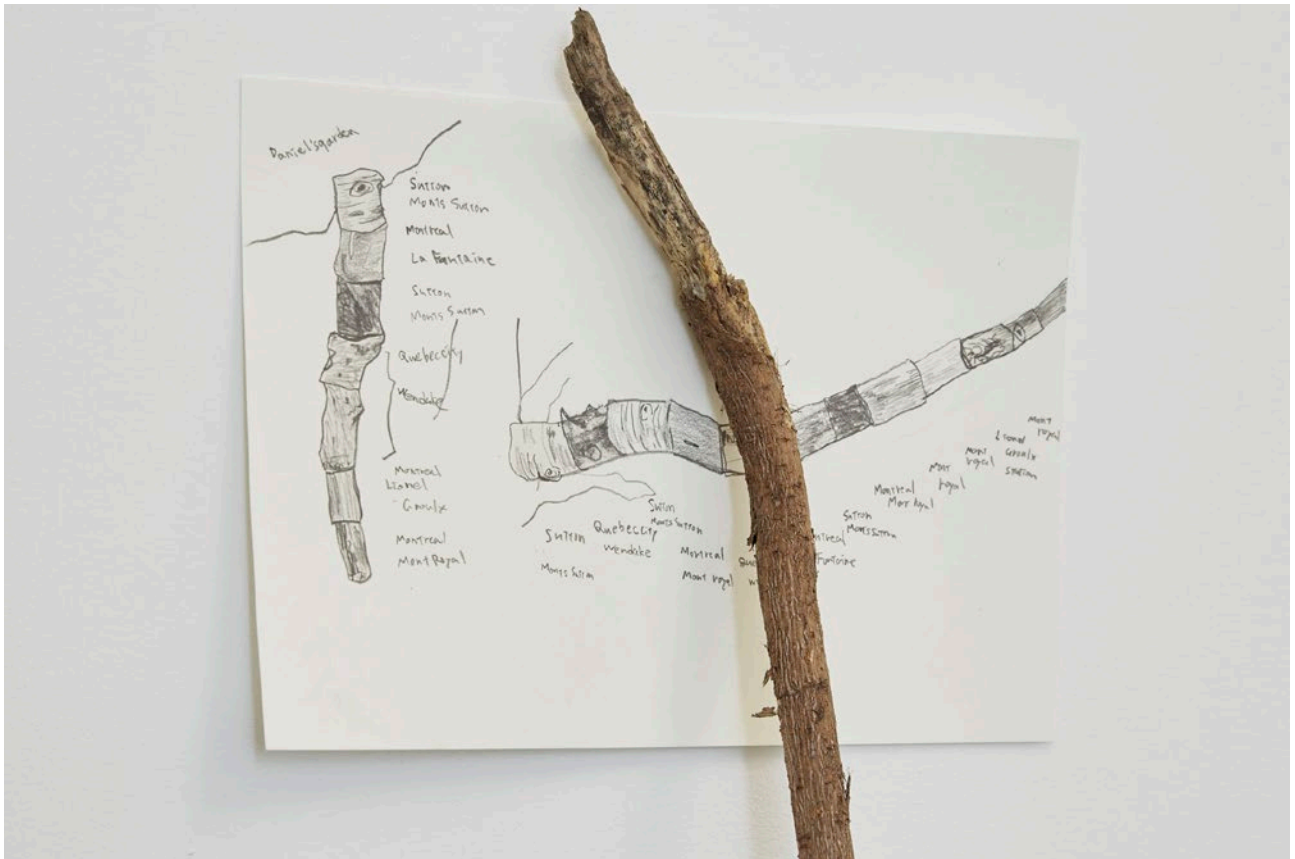


Photo: Alexis Bernard



2024 年、カナダ・ケベック州モントリオールに滞在し、自然現象と時間、土地との関係についてリサーチと制作を行った。

滞在のきっかけは、前年に日本で目にしたケベック州の大規模な森林火災だった。現地で人々に話を聞くなかで、災害として捉えていた森林火災が、新たな生命を生み出し森を更新する自然の循環の一部でもあることを知った。制作には、アイスストームによる倒木など現地で採取した木材を使用している。

また、到着前日に北米で観測された皆既日食をわずかな時間差で見ることができなかった。現地の人々がその美しさや感動を語る一方、森林火災やアイスストームは時に災害として経験される。

本作では、森林火災後に発生するきのこ「モレル」を生命の循環の象徴として捉え、乾燥したモレルが水を含み再び膨らむ映像と、現地で採取した木材による彫刻を組み合わせている。日食や森林火災をめぐる経験を重ね合わせ、プロジェクターによる光の奥行きを可視化することで、「時間を彫刻する」インスタレーションを試みた。

In 2024, I stayed in Montreal, Quebec, Canada, researching the relationship between natural phenomena, time, and place.

My research began with an interest in the large wildfires in Quebec. Through conversations with local people, I learned that wildfires are not only disasters but also part of a natural cycle that renews the forest. I used locally collected wood, including fallen trees from an ice storm, in my work.

I also narrowly missed the total solar eclipse that occurred the day before I arrived. While people described the eclipse as beautiful and moving, wildfires and ice storms can be experienced as disasters.

In this installation, I combined sculptures made from local wood with a video of dried morel mushrooms, which grow after forest fires, expanding in water. By bringing these experiences together with projected light, I attempted to "sculpt time."



Glowing stump

2025

サイズ可変

木、光ファイバー、シングルチャンネルビデオ

Glowing stump

Wood, optical fiber, single-channel video installation

Photo:TAKAHASHI Kenji
Courtesy of Tokyo Arts and Space



Photo:TAKAHASHI Kenji
Courtesy of Tokyo Arts and Space



Sparrow

2025

木、木炭

Photo:TAKAHASHI Kenji
Courtesy of Tokyo Arts and Space

Sparrow
Wood, charcoal



Squirrel

2025

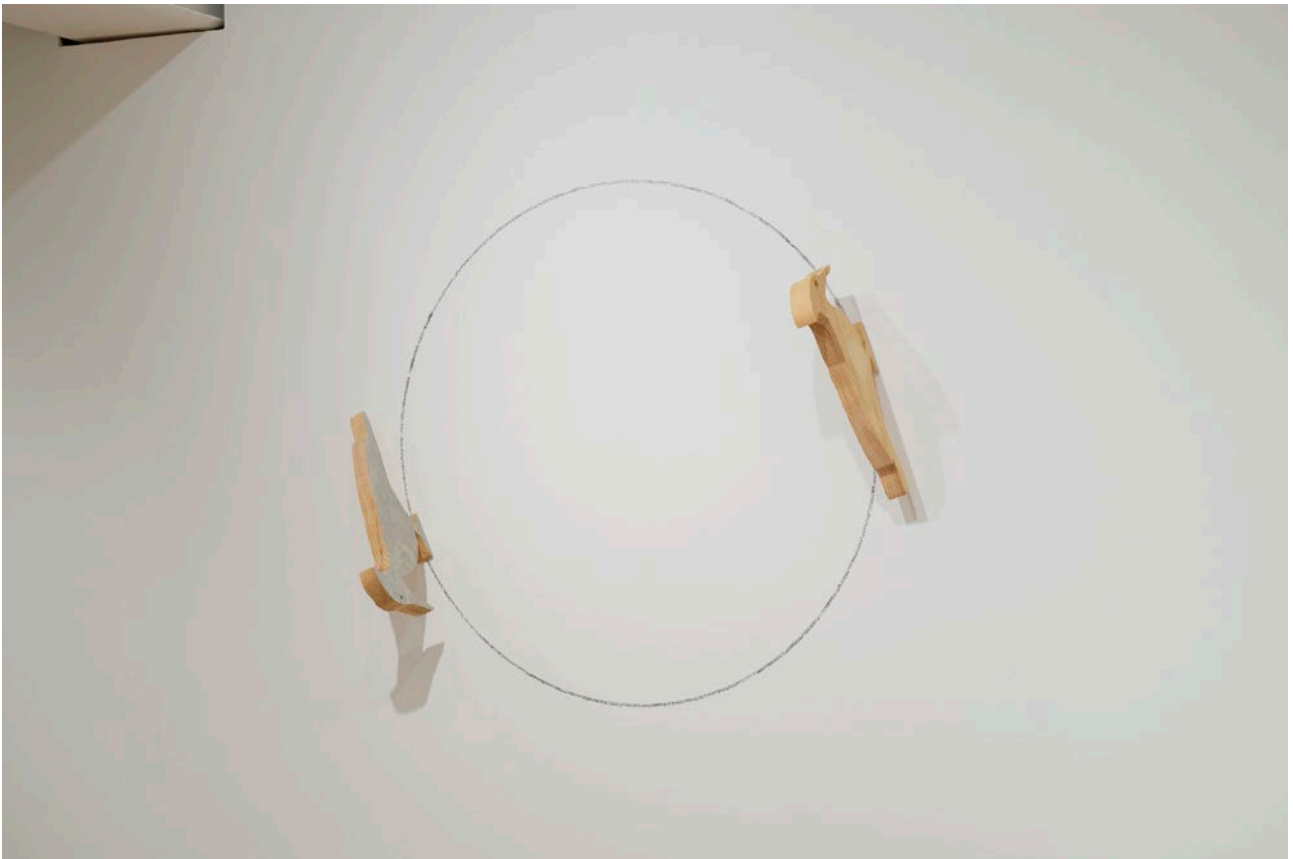
木、木炭

Photo:TAKAHASHI Kenji

Courtesy of Tokyo Arts and Space

Squirrel

Wood, charcoal



Woodpeckers

木、光ファイバー、着彩

Photo:TAKAHASHI Kenji
Courtesy of Tokyo Arts and Space

Woodpeckers
Wood,optical fiber, paint



Installation View

Photo:TAKAHASHI Kenji
Courtesy of Tokyo Arts and Space



何かを積むという造形行為のなかでも最も単純な方法は蓄積された時間・行為の記録ともいえる。

2023年2月から3月にかけて、研修という形で海外に行き、積まれて生まれた造形物とそこにかけられた人間の時間に想いを巡らす旅となった。

人生をかけて一人で作られた石積みの城 / 突貫で作られたため崩壊する煉瓦積みの城 / 日々住民が積みあげ高くなるゴミ袋の山

パリに到着した3月8日は年金制度についてのストライキが行われていた。到着早々に駅が封鎖され仕方なく徒歩移動すると街中では破られたガラスが散乱し、遠くでは火の手が見えるなど初日の夜はスト行為が激しかったが、以降滞在中に街中で暴動に遭遇することはないかった。

ただ、最初は気づかなかったが、日に日に街にゴミ袋が増えていっている。

ゴミ収集業者のストライキによって街中に設置されているゴミ箱にゴミが収まらなくなり、路上に黒いゴミ袋が積まれていった。

帰国後もさらに積み上がるゴミ袋の様子はSNSで拡散され、時間と共に意思や不満が増幅していくことが可視化されているようだ。

現地にいたら、異臭や鼠など衛生面の問題に直面しそれどころではないだろう。

山積みになったゴミ袋が放火されたことは帰国して間もなくニュースで知った。

事の発生時に現地で見えたものが、その後は海を隔てた遠い地からにおいも触感も感じられない画面越しに、人々の抗議の産物としてリアルタイムに造形が膨れていく。

幾許か生々しさが排除された「積まれていく袋」は時間と共に立ち上がる造形物として魅力を感じ、背景にある諸問題を忘れていることに罪悪感を感じた。

実物(とそれを取り巻く環境)と画面を通したつるりとした視覚情報との差は、「彫刻」を作る時に感じるホンモノへの届かなさを思い起こす。

この届かなさはいつも苦手で、届かせようとする必要もないと思うこともある。

でも、石ころやもたれかかる袋の重みを下から上に表面を辿って彫ることはできた。

遠回りだが、一つ一つの具体的な形を積み上げて、行為と時間を積むことは届かなさの一端を埋める一つ的手段にはなるかもしれない。

(展覧会テキストより)



Photo:Comura Mai

オートリーヴのカリアティード

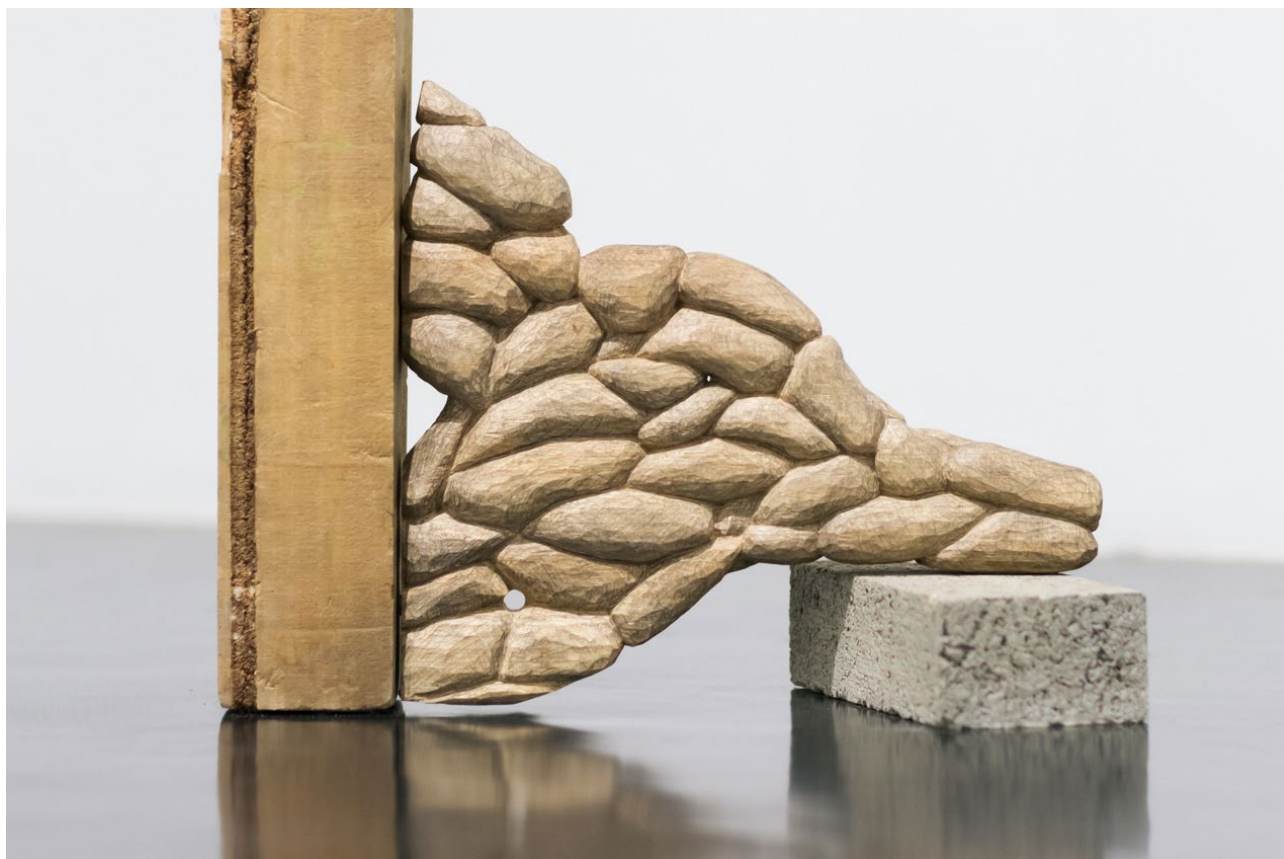
2023

112x48x20(cm)

木

Caryatid of Hauterives

Wood



Koinu III / Garbage bag Dog

Photo:Comura Mai

2023

28x33x4(cm)

木、鉛筆

Canis Minor 3 / Garbage bag Dog

Wood, pencil



立ち上がる身

2023

可変

木、ポリ袋

Photo:Comura Mai

Rising

Dimensions variable

Wood, plastic bags



Sandbag Girl
2023
124x36x4(cm)
木、着彩

Photo:Comura Mai

Wood, paint



Photo:Comura Mai



「あたらしい場所」アートギャラリーミヤウチ / 広島 Installation view

Photo: Nozomi Tomoeda

本作は広島をテーマにアーティストが制作・発表を行うプロジェクト。消失した映画館をテーマにリサーチ、作品制作を行った。

《港劇場》《松原館》《鯉城館》は昭和20年に実際に広島で開館していた映画館の名前である。

当時市内には17館の映画館が存在したが、昭和20年の原爆投下により、宇品に位置した港劇場を除いた16館は消失した。

広島の街の復興において、早い段階から興行施設も続々と再建され、昭和21年には新しく映画館4館（太陽館、広島劇場、国際映画劇場、福屋名画劇場）が建ち、翌年の昭和22年発行の地図には消失を免れた港劇場を含む11館が掲載される。

終戦から10年ほど経った昭和32年には映画館数は広島市内で60館にも及んだ。（参考：『ひろしまと映画』広島県興行組合／編 広島県興行組合 1957年）

当時の広島の復興において娯楽、文化がどれほど求められていたのかがここから見てとれる。

《港劇場》《松原館》《鯉城館》《ラッキー劇場》は消えてしまった映画館の名前や場所を、当時の広島の地図や写真をもとに探し、架空の星座として再びそれぞれの位置関係を結んだことで出来上がったかたちを彫刻作品にしたものだ。

これらの位置関係は、地図の真上から見たのではなく、東京から広島の方角を向いた視点であり、それは皮肉にもエノラゲイから原爆：リトルボーイが投下された際の機体の向きと重なった。これまで地理的にも時間的にも遠い存在と感じていた広島の歴史について、東京から映画等のメディアを通じた情報から俯瞰していた作者自身の視点とも言える。

また、戦後復興の大きなエネルギーのなかで生まれ、広島の文化芸術を支えてきた数多くの館も今はほとんど現存しない。

ラッキー劇場もその一つである。

ラッキー劇場のように、戦後復興時に生まれた映画館は現存せずとも豊富な上映資料が図書館に残されていたのに対し、原爆時により消えてしまった映画館の資料はほぼ残っていないことが対比された。消失の仕方、資料の残存数からも原爆のもたらす被害が「そこにあったもの」全てを一瞬で歴史からも消し去ってしまったのだと改めて読み取れる。

戦中から復興まで決して明るいとは言えない歴史を辿るなかで、ラッキー劇場という名前は映画館に行く前の少し浮ついた気分や娯楽が本来持つささやかな明るさを灯していた。



(上画像手前) 港劇場 / (上画像右) ラッキー劇場 / (下画像左) 鯉城館 / (下画像右側) 松原館
2023

Photo: Nozomi Tomoeda

石膏、スタイロフォーム、木、アクリル

Minato-gekijo, Lucky-gekijo, Rijo-kan, Matsubara-kan

Plaster, Styrofoam, wood, acrylic rods



Photo:Naoto Matsuki

「もれる光 のびる線」

断面

ご縁あってラジオに出演させてもらい、人生初の曲紹介では矢野顕子の「ごはんができたよ」を流させてもらった。この曲の金太郎飴的な歌詞のつくりが、当時作品のモチーフとしてよく取り上げていた星座の構造と似てるなと思っていた。金太郎飴的というのは、あるものに沿った時間軸を輪切りにし、ワンシーンごとに見せていくような、平面が連続して立体をかたちづくるような歌詞の展開のことで、輪切りのきゅうりでもイメージは近いかもしれない。

星座も、地球から見たら空に点が貼り付いてるだけに見えるが、実は隣り合う星同士も前後の奥行きが存在していて、光が届く時間が立体的な厚みを作り上げている。二つとも、ある面に対して無限に続く筒状の軸があり、金太郎飴みたいに輪切りにすると断面の絵がちょっとづつ歪んだりずれるような、そんな形が頭に浮かぶのだ。

オーソドックスに木彫作品を製作する際に、製材した平滑な面に線を引き輪郭をとっていく過程がある。

だいたい正面・側面・上面の3方向からの輪郭をとるとそれらしい量感になってくるのだが、1方向(正面)から見た輪郭だけをくり抜いた状態は、金太郎飴や輪切りのきゅうりのように間抜けで、連続する形の断面が無防備に曝け出されているようだ。

寄木

別々の木片を圧着して一体化させることを寄木という。接着面(断面)の面積に対して、手前・奥に長く木を繋ぐにはダボなどの芯のようなものが貫いていないと重さで剥がれ落ちたり、ポキリと折れてしまう。

レリーフを彫る最中に穴が開いて、向こう側の景色が突如として目の前に現れた瞬間、光が面を貫いてこちらに向かってくる。世界が開けたかのような、一つの次元が崩壊したかのような、ハッとする瞬間だ。

穴から貫かれるその光を芯にしたら、無数の断面を寄木でできそうだなと思った。光が届く限り続く、長い長い金太郎飴を逆再生できないだろうか。

(展覧会テキストより)



Photo:Naoto Matsuki

マイ ホール

2022

配置により変動。h1200×w600×d300(1 点のサイズ)

木、インク

My hole

Wood, ink



Installation view

Photo: Michiko Ishikawa



Photo:Naoto Matsuki

ブランチドローイング

2022

670 x 1330 x 203(mm)

木、光ファイバー

Drawing with branches

Wood, fiber optics